

福澤研究センター通信

News letter of Fukuzawa Memorial Center for Modern Japanese Studies, Keio University

第 2 号 2005年 3 月31日 発行

目 次

* 福沢研究センター創設の頃 石坂 巖 ……	2	* 主な動き ……	9
* 『近代日本研究』の過去と現在 寺崎 修 ……	3	* 主な新収資料 ……	10
* 講演会・セミナー概要 ……	4	* スタッフ一覧 ……	12



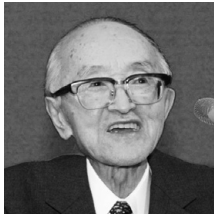
直径 90mm × 高さ 65mm



オランダにおける福沢諭吉
(Robert Severin 撮影)

* オランダで購入した茶碗 *

文久 2 (1862) 年幕府派遣の使節に随従してヨーロッパ各国を訪れた際、オランダで購入したと伝えられているもの。5月17日(1862年6月14日)ロッテルダム(Rotterdam)に到着、ハーグ(Hage)やアムステルダム(Amsterdam)、ユトレヒト(Utrecht)などで、銅鉄器械局や鋳貨局、学校、病院などを見学した。『福翁自伝』では「各国巡回中、待遇の最も濃なるは和蘭の右に出るものはない」と述べている。



福沢研究センター創設の頃

いし ざか いわお
石 坂 巖

(福沢研究センター顧問・名誉教授)

もう記憶が定かでないのですが、昭和50年代半ばのころ、私が商学部長をしていて、その学部長室に文学部の河北教授、法学部の高鳥教授、経済学部の飯田教授の、三人の各学部のお歴々の先生方がお見えになったことがあります。何のことかと思って、お話を聞くと、今の塾には塾史編纂のための資料室はあるが、まともな福沢研究機関がないから、そのような機関を設置したいので協力してほしいということでした。話を聞いてみれば、もっともなことで、私めかねがね思っていたことでもあるので、即座に同意したのですが、一つだけ条件をつけ、そのことに賛成していただければと返事をしました。

その条件は、研究は福沢先生関係のことばかりでなく、福沢門下生の活動、とくに地方の門下生の活動も研究の柱にするということでした。これは従来、門下生の研究が、中央で活躍した人たちに限定された傾向があったことと、中央と地方の活動があってこそ初めて、近代日本が形成されたということの反省からの、私の要望でした。これに対し三人の先生方はすぐ快諾してくれたので、それぞれ手分けして、福沢研究センター設立の要望書に署名をしてくれるよう、諸先生方へお願いすることになりました。そして数十名の先生方の署名をいただき、私が代表ということで、当時の石川塾長に福沢研究センター設置のお願いをしました。塾長も快く承知され、その上、設置場所を現在のセンターのある旧図書館内にきめてくれました。まさに福沢研究センターにふさわしい場所でした。

往時は先生方はご自分の専門分野の研究の他に、福沢研究もされていましたが、現在は一方で各研究分野が広がり、他方、研究が深化したために、自分の研究外のことには手を伸ばすことができなくなり、結局、福沢研究は、塾内では、塾史資料室の人たちにより行われることになっていました。しかしその塾史資料室は三田の山の上にはなく、正門の前の通りを目黒方面にいくと、左折するあたりに日産ビルがあり、そのビルの一室にあったのです。

こうして福沢研究センターが旧図書館内に設置され、事務組織も整備され、組織的に活動することになったのは、昭和58年のことでした。

先の三人の先生方のほかに何人かの先生に運営委員になっていただき、センターの研究活動が始められた矢先

に、思いもよらなかった問題が生じました。

三越が費用八千万円を用意して、「生誕150年記念の福沢論吉展」の開催を塾にもちかけ、塾側は問題なく承知し、その実行を福沢研究センターが担うことになったのです。

これは当然のことでしたが、センターにしてみれば発足まもなくで研究活動を展開しようとする矢先に、大変な課題を背負うことになりました。

期日は三越側の案に即して、福沢展をすることになったのですが、東京の本店で昭和59年10月9日から21日まで、大阪店で昭和59年12月29日から60年の1月13日まで、そして横浜店で4月2日から7日まで実施することになりました。その準備や終わってからの後始末で結局、昭和59年から60年にかけ、あしかけ2年センターの仕事は、福沢展に集中されることになったのです。

センターとしてはまず、「福沢論吉展」の基軸になるべき理念を、どのようにすべきか、運営委員会で議論し「黒船来航から独立自尊まで」ということに決めたのですが、決まるまで3日間の議論を要したのです。このように展示の仕方、関係資料の選択について、いろいろと議論を重ねなくてはならず準備は大変な仕事でした。結局、展示は4部門に分け、第1部「中津と福沢論吉」、第2部「黒船ショックと西欧体験」、第3部「日本の近代化と福沢論吉」、第4部「新時代の形成者たち」ということで、資料を整理し展示することになりました。そして各部門に責任者を置いて担当していただくことにしました。

展示の骨格はこうして出来たのですが、このあとの必要な資料集めがまた大変で、塾内にはない資料は借用しなくてはならず、その資料探しと借用願いに多くの時間がかかりました。借用した資料はいずれも歴史的に貴重なものばかりでしたが、なかには門下生がもらった文化勲章などもあり、展覧会開催の半年も借用するので、その保管にはかなり気を遣いました。

展覧会が済み、資料もそれぞれに元の場所や所有主にもどし、また世話になったところへの報告とお礼参りなど、一切のことが終了したのは、昭和60年の秋のはじめで、翌昭和61年春には、私は定年退職しましたから、結局、センター在任中は展覧会のことに終始したことになります。今から思えば苦しくもありましたが、一方いろいろ新しいことを知って楽しみでもありました。



『近代日本研究』の過去と現在

てら さき おさむ
寺 崎 修

〔福沢研究センター副所長・法学部教授〕
〔『近代日本研究』編集委員長〕

福沢研究センターが創立20周年を迎え、そしてなによりもセンターがここ5年来、全力を傾注してきた『福沢論吉書簡集』全9巻（岩波書店）が完結したことを契機に、センターではさらなる飛躍をめざして、小室正紀所長を先頭に次々と新しい取組が始まっている。写真資料のデータベース化、ホームページの開設、「福沢研究センター講座」の開講、『慶應義塾150年史資料集』（全20巻）の編纂、さらにはセンターの研究紀要『近代日本研究』（以下『研究』と略す）の一層の充実などである。

福沢研究センターの顔ともいえるべき『研究』は、昭和60（1985）年に創刊されて以来、すでに20巻が刊行され、この3月には第21巻が刊行される。この間、『研究』がたどった道筋を振り返ると、一貫して変わらないところと、それぞれの時代において微妙に変化している部分があることがわかる。第21巻がまもなく刊行されるのを機会に、私なりに『研究』の過去をふりかえりつつ、この1年間の編集委員会の取組についても言及してみたい。

『研究』は、いうまでもなく福沢を中心とする近代日本研究発表の場として、塾内はもとより、塾外あるいは海外に対しても広く開かれるべき研究誌だが、草創期の『研究』では、塾外の研究者との交流・連携をとくに重視し、研究テーマも必ずしも福沢や義塾に関連するものに限定しないという方針が採られた。その当否については議論のあるところであろうが、ともすれば「井の中の蛙」に陥りやすい塾内の研究状況を一举に打破しようとするこの試みは、勇気ある英断だったといえるだろう。ちなみに『研究』第2巻は、福沢の生誕150年を記念して編まれた大部の特集号だが、論文執筆者20名のうち大半を塾外者が占め、現役の塾内者はわずか6名にとどまったのであった。

草創期を過ぎると『研究』は、かねてより塾内者を中心におこなってきた共同調査・研究の成果を相次いで掲載する。近代日本建設の礎となった福沢門下生の全国的調査の成果をまとめた福沢門下生特集号（第4巻）や「慶應義塾における知的伝統」と題し、田中一貞、堀江帰一、田中萃一郎、林毅陸、神戸寅次郎、板倉卓造、福山雅男、磯野計、小泉信三などの先学をとりあげた連載（第7・8・9巻）がそれである。もともとセンターが福沢の思想・業績の研究ならびに普及につとめること、慶應義塾の歴史、塾員の活動と業績に関する調査・研究および資料の蒐集活動を行うことを目的として設立されたこと

を考えれば、こうした研究が強力に推進されるべきことは当然である。福沢や慶應義塾に関する資料を蒐集・保存し、これを研究・公開し、世界へ向けて発信することは、まさにセンターに課せられた大きな使命といわねばならないからである

しかし、このことは、センターが「本来の使命」を果たすなかで、「草創期の精神」を生かすことの難しさをあらためて痛感させられることになった。「本来の使命」を重視すればするほど「草創期の精神」は薄らぎ、逆に「草創期の精神」を重んじすぎると、「本来の使命」が手薄になりがちとなるからである。第10巻以降、塾外者と塾内者の個別研究をバランスよく配置したり、あるいは福沢や義塾と直接関係のない論文でも積極的に掲載するなど、さまざまな工夫がなされたのは、「草創期の精神」を消さないようにとの思いが働いたからであろう。

さて、第21巻の編集に際し、編集委員会はいくつかの改善を試みたが、とくに重要なものは次の2つである。

第1は、「特集」を組み、そこに塾内外の研究者に参加してもらうことにしたことである。毎回「特集」を組めるかどうかはわからないが、編集委員会が設定した「特集」テーマのもとで、内外の多くの研究者が競演することになれば、『研究』の存在意義はますます高まると考えたからである。今回刊行される第21巻では、没後100年を迎える「小幡篤次郎」を特集したが、次号の第22巻では「交詢社」を特集する予定である。

第2は、自由テーマの一般投稿論文を幅広く募集するため、「投稿規程」を定めたことである。今回は全国から7編の応募があり、規程にもとづく査読の結果、5編の論文等の掲載が認められた。いずれ劣らぬ力作だが、次巻以降も今回同様、優れた論文が多数投稿されることを願っている。



韓国における「福沢諭吉」

りん そう げん
林 宗 元
(韓国関東大学校人文大学学長)

韓国における近年の福沢諭吉についての研究から注目すべきものを選び、以下のように紹介する。

LeeKiYong「兪吉濬と福沢諭吉の政治論の比較研究」, 2000

朝鮮では朱子学の一元的な思想の体系が中心をなしてきた。朱子学の極端主義においては、正学（ジョンハク）と異端との区別を厳しくつけ、異なる思想や学問などを認めようとはしない。しかし、日本の場合は違う。徳川時代には儒学が古学、朱子学、陽明学などに展開していった。儒学者たちが神道や仏教、または蘭学に向かうこともできた。また、日本は鎖国をしていたものの、朝鮮にはない長崎という窓口を持っていた。朝鮮と日本の両国は、同じく儒教文化であったものの、根本的には各々違う立場に置かれていたわけである。兪吉濬と福沢諭吉の「一君万民体制」という構想は、その形だけは非常に似ているけれども、兪の場合、五倫の道德の範疇の中に、確かに君主の存在も入るわけであるが、福沢の場合には、天皇は道德性までも超越する絶対の存在であった。それは福沢諭吉の指向するところが強力な国家権力をもつ国体の確立にあったからである。

HanKyooSeon「福沢諭吉の政治思想」, 1977

福沢諭吉が『文明論之概略』を発表した時点では、民族主義の要素のない自由主義の思想家であったが、以後、自由主義の要素のない民族主義者に変じたという仮説は、正しくない。『学問のすゝめ』を綿密に読んでみると、彼は自由主義者であるばかりではなく、民族主義者として出発している。

福沢諭吉は、初期の頃から国際関係を念頭におきながら民族主義と自由主義的な見解を共に持っていた思想家である。当時の福沢諭吉は、自由の概念をいち早く正しく認識させようと、相当の努力を傾けていたし、自由の重要性に対しても繰り返して強調している。福沢諭吉における自由とは、道徳的な自律、個人の自己発展、そし

て市民的な徳（morality）を意味するものである。

金叡奎「福沢諭吉と朝鮮の開化派」, 1987

福沢諭吉は元々は朝鮮へあまり真剣な関心を持っていなかった。その福沢がなぜ、朝鮮の開化派の人々に出会って以後大きく変わり、武力を持ってでも積極的に干渉すべきだと主張するようになったのであろうか。

第一、1876年の江華条約以後の、彼の対中国牽制の心理、朝鮮の反発、日本政府の政策の変換などの状況、第二、西欧列強に対する疑念、第三、朝鮮の開化派の



講演中の林宗元氏

人物との出会いによる新鮮な衝撃、などがその理由であろう。また福沢諭吉についての最大の争点の一つである「脱亜論」は、朝鮮への干渉を正当化し、これから西欧諸国と共に隣国朝鮮を侵略する、と宣言したものに過ぎない。また福沢諭吉が自ら政治、経済、文化など、諸方面にわたって開化派の人物たちを援助した記録が残っているが、このような支援もまた侵略的な発想から始まったものである。

崔徳寿「福沢諭吉の朝鮮観研究」, 1987

韓国における福沢諭吉の研究の状況は、概して彼と親密な関わりを持つ開化派の人物の研究が行われるのに付随して言及されがちである。特に、兪吉濬の思想形成に多大なる影響を及ぼした人物としての福沢諭吉、というような視角から彼に対する評価がなされてきた。青木巧一は、福沢と朝鮮の開化派との関係から、『時事新報』における対朝鮮観の分析などに至るまで、研究の幅を広げてきた。特に氏は、福沢諭吉が朝鮮の開化運動および、開化思想の形成に及ぼした影響、というような点に焦点を絞っている。坂野潤治は、明治日本の対外論研究という大きなテーマから出発して、壬午軍乱、甲申政変前後における日本の対アジア観、またはアジア政策論の変遷過程という観点から、福沢諭吉の朝鮮認識という分野に至るまで、集中的な検討を行っている。日本人の研究者たちが例外なくこの時期の前後を研究対象にするのは、

何よりも「脱亜論」の発表、福沢諭吉と緊密な関係にあった金玉均など急進の開化派の人によって、甲申政変が主導されたという点に注目したからであろう。

HankyooSeon「福沢諭吉と李光洙の反儒教論の政治思想的な意味」, 1997

東アジアの政治思想における反儒教の思想の意味と性格には、二つの明瞭な観点がある。一つは、西欧の政治思想に即した儒教的な政治思想の再解釈というものと、もう一つは、儒教的な政治思想の観点から見る西欧の政治思想の再解釈というものである。これら二つの観点を同一の線上において眺めるとしたら、われわれには反儒教主義というものが儒教的な政治思想と西欧思想とを同時に修正するよりほかはないと思われてくる。福沢諭吉と李光洙。両人はともに反儒教主義者である。両人はいくつもの共通する見解を持っている。つまり、両人とも、真理とは時間と空間の変化如何により変わるものであるという歴史主義に立ち、儒教は現在の社会とは共存できないと考え、儒教権力を取り崩すために家族的な倫理の不当性を指摘し、家族制度の基礎などを攻撃し、「孝」を儒教的な専制主義の中心的な概念と理解し、中流階級(middle-class)すなわち学者の役割を強調している。

KimBongJin「福沢諭吉の対外観」, 1991

福沢諭吉の対外観を貫く目標は近代国民国家の形成にあった。外部から小国日本を守るために、かつ無謀なる攘夷論者を啓蒙するために、自然法的な国際秩序観に即した強力な国家権力に憧れていたと考えられる。『文明論之概略』以後には、自然法に関してほとんど言及していない。つまり欧米の国際秩序の中に入って、万国公法というものを盾にして、力を持って争える、という自信を持つようになったからである。西洋の文明を相対化しながらも状況的にはこれを絶対化する。そのため、ウチとソトとを区分しながらも、状況を見てソトを侵害するものだという、矛盾した論理に陥る誤りを犯す。福沢諭吉の論法の限界を乗り越えなければならないという課題を忘れてはなるまい。

(本稿は、2004年10月29日に開催された第2回福沢研究センター講演会の概要である。)

近世儒学思想史と福沢諭吉

ひら いし なお あき
平 石 直 昭

(東京大学社会科学研究所教授)

近世儒学思想と福沢思想の関係については、つとに丸山真男やカーメン・ブラッカー、松沢弘陽、テツオ・ナジタ、安西敏三らによる種々の論及がある。この講演では『文明論之概略』の執筆動機について福沢が「儒教流の故老に訴へて其賛成を得ること」(全集緒言)を意図したと述べていることに注目し、そのために福沢が近世儒学のどんな遺産を利用したかを考察する。



講演中の平石直昭氏

1. 『概略』第四章で福沢は孔孟の本説は倫理道德にあるとし、彼らが「当時の政治思想の範囲」に囚われて philosophy と political matter を混同していたと批判する。こうした孔孟＝倫理道德家という理解は、思想史的には伊藤仁斎をうけている。仁斎は「治道」と「道德」を区別し、前者の立場にたつ三代聖人と後者の立場にたつ孔子との間に決定的な段階の違いを見出した。そして仁斎においてこの理解は、政治は武家に委ね自分は道德に賭けるという生き方を基礎づけていた。この構図には維新革命後における福沢の身の処し方と照応している面がある。すなわち政治は政治家に委ね、自らは学問・理論に賭けるという役割分担の意識である。

2. 福沢は政治における条件適合性の必要を強調しているが、その表現様式には近世儒学における礼楽の相対主義の主張を継承している面がある。普遍的な「道」(五倫五常)に対して「礼法」は条件次第でかわるというのである。「開国」以後の日本が直面している根本的改革の必要を儒教流故老に説得するために、彼は近世儒学史

のストックにあったこの遺産を利用したといえよう。敵の武器を逆用している点が重要である。そこにはまた J.S. ミルから学んだ、文明の発展段階に応じた統治形態の必要（代議統治論）という条件的な認識も作用していたと思われる。

3. 第六章「智徳の弁」で福沢は「聡明叡智」を「公智」と名付けつつ、学者の議論にはこれを「徳」として捉える見方もあると断っている。ここで福沢は荻生徂徠の説を念頭においていたのではないか。「聡明叡智」は『易』や『中庸』に典拠があるが、近世儒学のなかで徂徠はくり返しこれを「徳」と呼んでいる（弁名・聖など）。彼によれば「聡明叡智」は聖人が天から受けた固有の「徳」であり、三代聖人は開国君主として、この徳によりそれぞれの置かれた客観条件の下で前代の礼楽に「損益」を加えて礼楽を作った。孔子が顔淵らにむかって四代の礼楽の折衷を語ったという『論語』の記述も、この見地から、周王朝末期に生きた孔子には新王朝のための礼楽制作の意図があった、という見方にたって解釈される。

福沢が徂徠におけるこうした意味連関をどこまで意識して「聡明叡智」を使ったかは分からない。しかし福沢は第七章で「智徳の行はるべき時代と場所」とを論じ、客観条件が大変化するなかで、「変通」が必要であり、軽重大小を判別する智慧の重要性を訴えた。これは聖人による礼楽制作について徂徠が「時に随ひて変易する」と呼んだのと通じる面がある。とすればここには、徂徠における王朝革命（制度変革）の精神が福沢において、維新革命を遂行し貫徹させるそれとして読み替えられた面を見ることができよう。J.S. ミルはオリエント停滞の理由を invention や精神的自由、enterprise の欠如に見出しているが、福沢はその代替物（少なくともその一部）を、「聖人」と不可分に結びついていた「聡明叡智」に見出して故老を説得するとともに、それを国民化することで日本文明化の促進を図ったといえるのではないだろうか。一つの仮説としてあげておきたい。

（本稿は、2004年11月12日に開催された第3回福沢研究センター講演会の概要である。）

朝鮮／韓国における 近代国家思想の形成と日本

こく ぶん のり こ
國 分 典 子
(愛知県立大学文学部教授)

十九世紀末、東アジア諸国は一様に開国と近代化を迫られることとなった。ここでは、東アジアの近代化過程のなかで朝鮮／韓国がどのような位置を占めていたのか、歴史の流れの中で韓国／朝鮮の近代化の思潮はどのように変化していったのかを考察する。

朝鮮王朝時代、特に朴泳孝や兪吉濬といった親日開化派と呼ばれる人々は、日本に近代化モデルを見出し、早くから福沢諭吉と交流をもって、多くの人士を日本に送り出すようになっていった。その後の国内の政治的紆余曲折により親日開化派の影響力は浮沈を繰り返すが、最終的に日本の朝鮮半島への影響は強化され、1910年の日韓併合に至ることとなったのである。こうした状況のなかで韓国内では、国家学、政治学等について日本人の作った教科書の翻訳版が使われる形での教育が進むという状況がみられた。一方、思想的にみれば、当初福沢らの思想に影響を受け自国の自強を図ろうとした朝鮮／韓国の人々は、次第に反日的になってゆき、むしろ類似した状況に苦しむ中国に改革モデルを求めるようになった。併合後、上海を拠点として、大韓民国臨時政府が設立されるが、臨時政府の綱領にも次第に中国の影響が強く現れるようになっていく。但し、国内での日本の影響と反日的な独立運動の思想には共通点がある。それはどちらも進化論的な自強の論理に支えられていたという点である。日中も含め、当時の東アジアにおいては、そもそも西洋思想が一気に流れ込んだ為に、必ずしも西洋の思想史的発展と同様の文脈でそれらが理解されなかったという問題がある。そのようななかで進化論は当時の最大の目標であった国家あるいは民族の自強の論理となって広く浸透したのであった。内容的に曖昧な性格をもつ進化論はどのような論理とも結合しようという側面をもつ。植民地支配下の独立運動では、進化論は、帝国主義の論理ではなく、平等を重視した社会主義的傾向を持つ理論と結合した。この流れのなかで第二次世界大戦の終

結を迎えた韓国は、思想的には平等重視の臨時政府の理念を継承しようとしたのであった。しかし、冷戦構造と南北分断によって社会主義的要素は払拭されざるを得なかった。こうして戦後の韓国は、よるべき価値原理を確定できないまま、自強を掲げて再び近代化のスタート地点に立たされるという問題を抱えることとなったのである。

(本稿は、2004年10月16日に開催された第3回福沢研究センターセミナーの概要である。)

韓国近代思想史における対外認識と『競争論』の初期的展開

— 兪吉濬と福沢諭吉の思想比較を通して —

おか かつ ひこ
岡 克 彦
(長崎県立大学経済学部助教授)

本報告は、主に兪吉濬(ユ・ギルチュン:1856-1914)の政治思想の中核をなす「競励原理」とそれにもとづいた彼の対外認識を論じたものである。彼は、周知のように韓国の開化期に日本の福沢諭吉から思想的な影響を受けた韓国の近代知識人である。

韓国の「開化」(近代)についての見方は、福沢諭吉に代表される「東洋連帯」論に大きな影響を受けている。この理論は、韓国や中国の近代的発展が日本の「文明化」の行程を一步遅れて辿っているという同系発展の観念にもとづいている。日本が近代の西欧文明を導入した東洋の先駆けであるので、日本型の「文明化」こそが隣国の近代発展の模範であるかのような論理が現れる。福沢が、金玉均らによって起こった甲申政変(1884)を積極的に支援したのも、一方で、その失敗に失望して「脱亜論」を説くに至ったのも、この論理的帰結だともいえる。

この論理は、韓国側から見ても、ある種のディレンマを伴うのである。韓国が、同系発展の観念に則って近代化に成功することは、日本の近代化を正当化することになる。近代化に失敗することは、日本と比べて韓国の近代化への内在的条件が存在しなかったことの承認を余儀なくされると共に、日本の植民地化に一定の理解を示さなければならなくなる、というディレンマである。こ

◇前期の講演会・セミナー

(予 告)

テーマ「明治期経済思想と福沢諭吉」

2005年度前期の講演会・セミナーは「明治期経済思想と福沢諭吉」という統一テーマで行う予定であり、現在、講演者・報告者と最終的な調整中です。

近年も福沢諭吉研究は、ますます盛んですが、どちらかと言えば政治思想史の視点からの研究が主流であり、「経済論者としての福沢諭吉」が取り上げられることは比較的少なくなってきています。

しかし、経済は、近代人の活動領域として福沢が何よりも重視していた部門であり、また、それ故に『民間経済録』や『実業論』などの単行本も著しています。このような点を考えれば、「経済論者としての福沢諭吉」は、より一層取り組まれなければならない研究分野です。

このような観点から、標記のようなテーマで前期の講演会・セミナーを行います。詳細は決定次第、近日中に福沢研究センターのホームページやポスターなどで広報致しますので、奮ってご参加ください。

のディレンマは、韓国近代の研究史にも大きな影を残した。

本報告は、こうした近代史のディレンマを止揚しようとする試みを兪吉濬の思想のなかから読み解こうとするものである。兪は、福沢の教えを受けながらもそれを踏襲せずに、むしろ韓国独自のアイデンティティを模索した。その際のキー・ワードとなるのが、「競励原理」である。これは、社会の進歩あるいは社会発展の原動力を生み出す「競争」(competition)という観念にもとづいて構成された概念である。兪は、国家を自立させ、韓国社会を活性化させるために「競励原理」に注目する。ただし、「競争」ということばを使わずに敢えて「競励」としたのは、国家や社会が弱肉強食の状態に陥る危険性を回避させるために、競争の「公正さ」を追求しようと

したからである。

特に、「競励原理」は、万国公法に対する兪の本質的な理解にかかわってくる。万国公法は、西欧列強の国家関係を法的に規律している。兪は、当時の「競争」観念の不当性を批判する。というのは、裸の競争論がまかり通る国際社会では、弱小国家が存立することのできる余地が少ないからである。したがって、兪は、国際社会の競争にこそ規範や制度を介在させて、その「公正さ」を確保することを力説する。当時、国際社会における「競争」をコントロールする制度的装置がまさに「万国公法」であった。「万国公法」でもって国際社会における競争の公正さを追及しようとした。これが「競励原理」を国際関係に具体的に展開した兪の基本的な観点である。

(本稿は、2004年11月6日に開催された第4回福沢研究センターセミナーの概要である。)

戦後日本思想史と転向

—— 清水幾太郎と内灘 ——

リッキー・カーステン

(ライデン大学日本近現代史教授)

「転向」は、日本近現代の場合に限らず、常に思想史として極めて興味深い問題である。とりわけ戦前から戦後にかけて大きな思潮の変化があった日本においては、なおさら重要な課題と言えるだろう。しかし、英語圏における日本研究のなかで、「転向」が取り上げられることは、きわめて稀であった。その研究者の数は、現時点では報告者を含め、5名に過ぎない。

一方、日本においては、1920年代より今日まで、「転向」について膨大な研究が蓄積されてきている。しかし、日本における研究の大部分は、戦中―戦後の転向にかかわるものであり、戦争責任問題という視点を持ったものである。つまり、戦争中にマルキストから「転向」した者、戦後に国粋主義者から「転向」した者などが対象となっている。しかも、「転向」の原因を外的要因に求めるものが多い。政治的弾圧や利害認識から、信念をまげて「転向」が行われたことを指弾し、その責任を問う研究である。

しかし、「転向」は、このような外在的要因からのみ

行われるものではない。ある思想家が元々抱いていた思想の内在的展開によって、信念にしたがって、「転向」が行われる場合もある。前者の「転向」は、思想史というよりは思想運動史であり、むしろこの後者の「転向」こそが思想史として、より興味深い対象であると言ってもよい。また、このような観点から「転向」を考えると、戦中―戦後ばかりでなく、「戦後転向」も注意を払うべき対象となる。

この報告では、上記のような観点から清水幾太郎(1907―1988)を取り上げた。清水は、戦前にすでに読売新聞論説委員などとして鋭い論説を発表し、唯物論研究会へ関係していたが、戦後は二十世紀研究所を設立し、戦後日本民主化のオピニオンリーダーとして一層華々しい言論活動を展開した。また、内灘や砂川の基地反対闘争、さら60年安保では、実践活動を先導した。しかし、こうした過程でも清水の思想には多くの変遷があった。なかでも、内灘は、清水の思想にとって大きな「転向」の契機であり、その後の民族・国家・伝統への回帰へつながる事件であった。

このような、清水の「転向」を引き起こした思想内在的要因を、この報告では、二つの面に見ている。第一の面は、1930年代以来の「歴史の中に生きる」という清水の思想姿勢である。これは、次にみる、歴史の主体としての庶民と共に生きるということにもつながるが、反面では、状況追従的姿勢ともなりうるものであった。第二の面は、歴史の主体が庶民であるべきだという信念である。この信念は、少年時における関東大震災の原体験から由来する。

この清水の思想にとって、内灘は、小さな村の庶民が国家に対して行った反対運動として、当初、大きな期待を抱かせるものであった。しかし、内灘における基地反対運動の経過とともに、清水ははじめて、歴史の担い手として、庶民の主体性を信じられなくなっていった。そこに、それまでの清水の思想基盤の崩壊が兆したのである。その後、清水は、歴史の主体をインテリ・思想家に求め、さらに伝統へ回帰してゆくことになる。

(本稿は、2005年1月22日に開催された第5回福沢研究センターセミナーの発表をもとに、編集部でまとめたものである。)

■ 編纂委員会活動開始

『慶應義塾150年史資料集』に関しては、これまでワーキンググループにおいて検討を続けてきたが、昨年11月より正規の編纂委員会が発足し、全20巻のうち第1回刊行予定の『慶應義塾史事典』につき具体的編纂方針の検討に入った。また、第2回刊行予定の『塾員・塾生情報集成』については基礎データの素入力が進んでいる。

■ 北東アジアの伝統と福沢諭吉

本誌に講演要録を掲載したように、本年度後期には、講演会2回とセミナー3回を開催したが、そのうち5回については、「北東アジアの伝統と福沢諭吉」という統一テーマのもとにプログラムを組んだ。今後も、セミナー・講演会に関しては、できるだけ統一テーマを設ける予定である。(4～8ページ参照)

■ 写真データベース

福沢研究センター所蔵の約1万点の写真のデジタル・データベース化は、本年度中に第1次の素入力がほぼ終わる予定だが、同時にDMC（デジタルメディア・コンテンツ研究統合機構）に協力し、約千点の写真をデジタル・データベースとして整理のうえ提供した。

■ ワークショップ

所員の提案企画による勉強会として、本年度後期よりワークショップが始まった。今期は2回（9月24日、11月9日）開催され、セミナー・講演会の統一テーマと連携して、韓国における近代化研究にかかわる問題が取り上げられた。塾内外の大学院生など若手の参加により活発な議論が展開された。

■ 展 示

「福沢諭吉と儒学」（第170回福沢先生誕生記念会・本センター主催）、「近代日本と福沢諭吉」講座開講記念小展示（日吉メディアセンターに協力）、「新一万円札発行記念展示」（総務部・三田メディアセンターと共催）などを開催あるいは協力共催した。また、塾外でも「新一万円札発行記念福沢諭吉の遺品展」（中津市福沢記念館）などに協力した。なお、11月には、旧図書館1階の福沢記念室およびロビーの展示を更新し、ブラッシュアップした。

■ 小泉家資料整理開始

8月に寄贈された小泉信三関連資料については、幼稚園教諭神吉創二君を中心に、資料目録の作成が進められている。(11ページ参照)

■ 取材・問合せ

相変わらず、取材・問合せは多く、毎日新聞やNHKのような公共報道機関から塾員や一般市民まで多岐に亘った。問合せの中には、個人情報保護の観点から、またセンターの組織としての性格上、お答えできないものもしばしばあったが、それ以外については、できるだけ情報の提供に努めた。

■ 『福沢諭吉書簡総目録』刊行

平成15年に完結した『福沢諭吉書簡集』（全9巻）は、2564通の福沢書簡を収めているが、その他にも封筒のみが残存しているものや、代筆書簡など参考となる関連資料が存在する。また、その後に発見された書簡もある。本目録は、それらを含めて、福沢書簡を書簡番号順、発信年月日順、名宛人別に再整理し目録としたものである。併せて、福沢宛書簡や『書簡集』（前出）補注「ひと」「こと」も加えた。福沢書簡を研究資料として利用する際に、座右に置くべき目録として、3月に刊行した。

■ 諸 会 議

- 第2・3回運営委員会（11月4日、2005年2月28日）
- 第2回センター会議（12月16日）
- 第3・4回『近代日本研究』編集委員会
（10月6日、11月10日）
- 第1・2回『慶應義塾150年史資料集』編纂委員会
（12月11日、2005年1月25日）

■ 講師派遣

- 米山光儀：福沢諭吉記念祭全国高等学校弁論大会
（11月25日、於中津文化会館）
- 小野修三：第105回忌法要記念講演
（2月3日、於中津明蓮寺）

■ 刊行・編纂物

- 福沢研究センター資料10『福沢諭吉書簡総目録』
（上記参照）
- 『近代日本研究』第21巻（2005年3月刊）

主な新収資料

平成16年9月から12月までに、新たに収蔵された資料のうち、主なものを紹介する。

福沢諭吉書簡

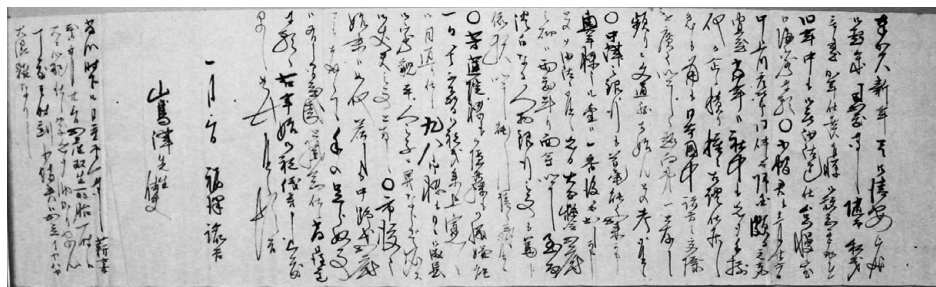
■ 門田三郎兵衛宛 明治13年6月5日付

門田三郎兵衛は大阪で材木問屋を営む豪商で、酢を2桶贈られたことへの礼状。追伸で、贈られた酢は腐っており、腐ってなくても実はあまり好物ではない、言うのも失敬至極かと思うが言わないのもまた失敬だと思い、懇意であるからこそ、今後のご惠贈はお断りすると正直に述べている。福沢の気質をよく表した書簡といえる。

この書簡は額装されており、長い間掲げられていたためか劣化が激しく、茶褐色に変色してしまっている。

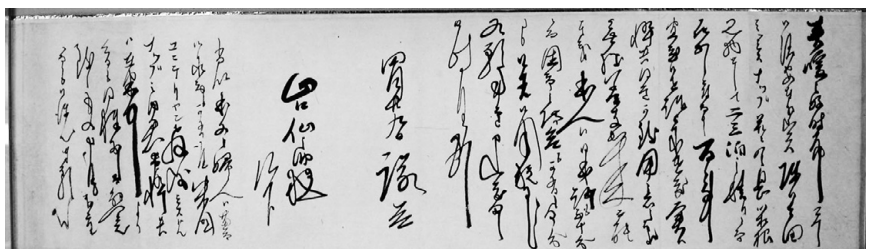
■ 島津復生宛 明治11年1月3日付

新年の挨拶とともに、小幡篤次郎や中上川彦次郎といった中津出身者、芳蓮院や奥平昌服など奥平家の人々の近況を告げている。また、第七十八国立銀行の首尾や中津市学校についても触れている。『福沢諭吉全集』第17巻220頁によれば、この書簡は表に「島津万二〔次〕郎様 福沢諭吉 拝答 要用」、裏に「封」と書かれた封筒に入って保存されており、「この封筒と本文とは別のものを誤つて一緒にしたもののように思はれる」と説明されている。しかし今回購入する際には、封筒はなかった。



■ 山口仙之助宛 明治22年4月29日付〔富田道彦氏・高村誠一氏寄贈〕

山口仙之助は慶應義塾卒業後、箱根宮ノ下の富士屋旅館を買い取り、日本最初の本格的ホテル経営に成功した人物。書簡は箱根を旅行する慶應義塾教師A・M・ナップの夫人と子供の世話を依頼したもの。



その他の書簡

■ 小幡篤次郎書簡 5通〔櫻井順氏寄贈〕

桜井恒次郎宛（明治26年2月21日付）、奥平けい・桜井貞・桜井信四郎・柏木政宛（明治32年1月31日付）、小幡とし・小幡高次郎・小幡映・小幡静・小幡郁・小幡直吉・小幡慶宛（明治35年4月18日付）、桜井信四郎宛（明治36年9月11日付）、小幡とし・小幡初・小幡高次郎・小幡映・桜井信四郎・桜井静・小幡郁・小幡直吉・小幡慶宛（明治37年6月21日付）。

小幡篤次郎（1842-1905）は中津藩の上士階級200石取り小幡篤蔵の次男で、学校経営を急務と考えた福沢が、元治元（1864）年帰郷した際それを担う人材として中津より連れてきた人物である。福沢の期待にたがわず、小幡は慶應義塾の運営を生涯にわたって補佐した。書簡5通はいどこである桜井恒次郎やその家族、自らの家族に宛てたものである。福沢研究センター紀要『近代日本研究』第21巻で全文を紹介している。

訂正）前号11頁で、『福沢諭吉全集』未掲載とした時事新報原稿「七月四日」は既に掲載されていました。お詫びして訂正致します。

小泉家旧蔵資料

【寄贈の経緯】

この度、元塾長小泉信三先生の次女小泉妙氏とその夫君準蔵氏から膨大な量の小泉信三関係資料が寄贈され、福沢研究センターに収蔵された。小泉先生のスポーツに関する随筆集『練習は不可能を可能にす』の編集などで、小泉妙氏とお話する機会に恵まれる中、所蔵の遺品、とりわけ皇室から戴いた品々が将来散逸することがあってはとのご懸念を伺ったことが切っ掛けとなり、塾長、担当常任理事をはじめとする関係諸氏の尽力も得て、収蔵に至ったものである。現在、前述の随筆集の共同編者である幼稚舎教諭の神吉創二君らによって資料の整理が行われている。ご夫妻の義塾への深い情愛とご厚意に感謝すると共に、それに応える為にも、近い将来に、福沢先生と塾史に関するミュージアムが出来、常設展、企画展などで塾内外に展覧できる機会のあることを願うものである。

福沢研究センター所員・看護医療学部助教授 山内 慶太

【資料整理にあたって】

小泉信三は、福沢諭吉の高弟、小泉信吉を父として明治21年三田に生まれ、普通部より慶應義塾に学んだ。明治43年、大学部政治科卒業と同時に慶應義塾の教員になり、イギリス・ドイツへの留学後、大学部教授として経済学、社会思想を講じると共に、昭和8年から22年まで塾長を務めた。又、昭和24年より東宮御教育常時参与として皇太子殿下（今上天皇）の御教育にあたったことは広く知られているが、昭和41年急逝の直前の著書『福沢諭吉』（岩波新書）をはじめ福沢研究にも多大の業績を遺ただけでなく、富田正文の『福沢諭吉全集』編纂を終始励まし、塾内外を問わず、後進の福沢研究の発展に心を砕いた人でもあった。

小泉先生がかつて中心選手として活躍し、部長としても「庭球王国慶應」と称されるまでに部を育てた体育会庭球部に、私も学生時代に在籍していたが、庭球部創部100周年の記念誌『慶應庭球100年』編集に携わり、又、昨年4月に刊行された随筆集『練習は不可能を可能にす』（慶應義塾大学出版会）の編纂にも携わった。これらの本の反響から、小泉先生を直接知る世代の塾員だけでなく、今日の塾生の中にも、小泉先生の文章に深い感銘を受け、且つ、その著作を通じて、福沢諭吉と義塾の歴史に興味を抱く人が少なくないことを知ることができ

た。その意味でも、小泉先生の功績を後世に伝える際の核となる貴重な資料が、義塾の福沢研究センターに収蔵されたことは意義深い。

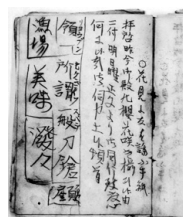
主な資料には、日吉蝮谷テニスコートにある記念碑「練習ハ不可能ヲ可能ニス」の遺墨、小学校時代の雑記帳、『海軍主計大尉小泉信吉』をはじめとする執筆ノートなどがある。また、友人佐藤春夫らの遺墨と絵画、多くの来簡（吉田茂、池田成彬、平沼亮三、安部能成、吉川英治、岩田豊雄《獅子文六》、徳川夢声、古今亭志ん生、志賀直哉、武者小路実篤など）から小泉信三の幅広い交友とその時代の文化を垣間見ることができる。又、今上天皇からの御弔歌、皇后陛下からの御歌、天皇陛下の皇太子時代に英語を教えていた Elizabeth Gray Vining との百通にもおぼる書簡からは、御教育参与としての小泉の姿勢を偲ぶことができる。その他、終戦直後の資料等、小泉研究の一助となるだけでなく、塾史にとっても貴重な資料となるであろう。

幼稚舎教諭 神吉 創二

■ 遺墨「練習ハ 不可能ヲ 可能ニス 信三」

晩年「スポーツが与える三つの宝」についてよく語り、その第一の宝が「練習は不可能を可能にす」であった。

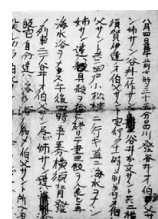
■ 雑記帳 明治28年ごろ



御田小学校時代の雑記帳で、学校近隣の通りや坂の名前を書き出したり、手紙の習作、学校の時間割などを書き留めている。空襲の際ガレージにあって焼け残った。

■ 日記 明治28年ごろ 8月4日-6日付

上記雑記帳には含まれていたもので、やはり明治28年ごろのものと思われる。谷井一作とともに横須賀の海軍機関大尉伊達只吉の家に預けられ、水泳を習ったときのことなどが記されている。



■ 『海軍主計大尉小泉信吉』執筆ノート

「信吉の事覚書」というタイトルで書き出され、息子小泉信吉についての思い出などが箇条書きに綴られている。単なる羅列ではなく、かなりの推敲のあとが見られる。『海軍主計大尉小泉信吉』は、最初私家版で出版され、のち昭和41年に文藝春秋から公刊された。

スタッフ一覧

所 長	小室 正紀	経済学部教授	客員所員	飯田 泰三	法政大学教授
副 所 長	岩谷 十郎	法学部教授		井田 進也	大妻女子大学教授
	寺崎 修	同		區 建英	新潟国際情報大学教授
運営委員	池田 幸弘	経済学部教授		掛川トミ子	関西大学名誉教授
	梅垣 理郎	総合政策学部教授		片岡 豊	白鷗大学教授
	小野 修三	商学部教授		我部 政男	山梨学院大学教授
	久納 孝彦	理工学部教授		川崎 勝	南山大学教授
	竹内 勤	医学部教授		佐藤 正幸	山梨大学教授
	樽井 正義	文学部教授		白井 堯子	千葉県立衛生短期大学名誉教授
	林 温	同		進藤 咲子	東京女子大学名誉教授
	米山 光儀	教職課程センター教授		曾野 洋	玉川大学助教授
所 員	有末 賢	法学部教授		高木 不二	大妻女子大学短期大学部教授
	岩崎 弘	幼稚舎教諭		長 幸男	東京外国語大学名誉教授
	牛島 利明	商学部助教授		西田 毅	同志社大学教授
	大久保忠宗	普通部教諭		浜野 潔	関西大学教授
	太田 昭子	法学部教授		平山 洋	静岡県立大学助手
	大塚 彰	志木高等学校教諭		藤原 亮一	苫小牧駒沢大学教授
	加藤 三明	幼稚舎教諭		堀 幸雄	
	斎藤 暁子	女子高等学校教諭		前坊 洋	東北公益文科大学助教授
	坂本 達哉	経済学部教授		松沢 弘陽	
	西沢 直子	福沢研究センター嘱託〔教員系〕		松田宏一郎	立教大学教授
	平野 隆	商学部助教授		宮村 治雄	東京都立大学教授
	藤田 弘夫	文学部教授		森川 英正	
	松崎 欣一	志木高等学校教諭		山田 央子	青山学院大学助教授
	山内 慶太	看護医療学部助教授		林 宗元	韓国関東大学校人文学部学長
				Checkland, Olive	グラスゴー大学名誉研究員
				Craig, Albert	ハーバード大学名誉教授
顧 問	飯田 鼎	名誉教授	研究嘱託	山根 秋乃	
	石坂 巖	同			
	内山 秀夫	同			
	河北 展生	同			
	桑原 三郎	元幼稚舎教諭	事 務 局	武 正恒	事務長
	小泉 仰	名誉教授		赤尾 迪子	事務員
	佐志 伝	元高等学校教諭		三瓶美和子	同
	坂井 達朗	名誉教授		小川 悦子	嘱 託
	中村 勝己	同		勝又由紀子	同
	西川 俊作	同		木崎 洋子	非常勤嘱託

慶應義塾福沢研究センター通信 第2号

News letter of
Fukuzawa Memorial Center for
Modern Japanese Studies,
Keio University

発行日 2005年3月31日（年2回刊）
編 集 慶應義塾福沢研究センター
発 行
〒108-8345 東京都港区三田2-15-45
電 話 03-5427-1603
<http://www.fmc.keio.ac.jp/>
印 刷 （有）梅沢印刷所